

第 55 話 スタジオ夜話 (番外編)

サウンドドラマの制作

(音声調整卓) V

☆ はじめに

前号の冒頭で台風のお話しをしましたが 10 月の後半になっても大型台風が日本直撃、各地に大きな被害をもたらしました。秋台風が過ぎると寒さが急に厳しくなるそうです。寒暖差の大きいこの時期、読者皆様におかれましては健康にお気をつけてお過ごしください。

さて今回のスタジオ夜話番外編は前回に引き続き具体的な制作上の音声調整卓の機能的側面やミキシングテクニックについてお話しします。また DAW の操作についても若干触れて行きたいと思います。また様々な点で賛否多いお話になるかとも思いますがお付き合いのほどよろしくお願いたします。

☆ 素朴な疑問? テクニックカットイン・カットアウト

前回素朴なテクニック、フェードイン・フェードアウトの操作についてお話ししました。その続きカットイン・アウトです。

サウンドドラマ制作ではフェードイン・アウトに続いてよく使うテクニックの一つです。多くは場面転換や感情の高まりなどの余韻効果的な使われ方が多いようですがこのテクニックを使うに当たっては多少の工夫が必要です。(図参照) 前回説明したフェードイン・アウト同様カットイン・アウト時のレベル設定に一工夫です。インする時は若干大き目のレベル設定で、またアウトする時はクレッシェンド後にアウトするといった簡単なことです。しかしスタジオ夜話的にはもう一工夫したいところです。この一工夫には音と音をつなぐ接着剤? 的效果なども期待できます。打楽器音を使った一例でお話しします。例えば街中の雑踏から静かな室内などに場面転換する時、街中雑踏音を若干クレッシェンドさせカットアウトするよりもカットアウトする少し前からそのシーンに合ったテンポの打楽器を重ねて行き雑踏のカットアウトレベルをその打

楽器が超えたところで打楽器に残響を残し雑踏音と共にカットアウトするなどは効果的なカットアウトとなります。カットインの場合でも何か印象的な音その冒頭にプラスすることで印象的な場面設定ができるようになります。またどう考えてもつながらない音どうしを無理矢理? つなげるにはこの方法は有効です。つなげる音どうしのポイントにセンス良く選んだ大きな音一つ重ねるその中で入れ替えてしまうなどいざという時に有効です。音の接着剤いくつか用意しておくことをお勧めします。

☆ 素朴な疑問? テクニック BG レベルって何?

以前にも少し触れましたがミキシングテクニックのなかで BG レベルというのが存在するようです? 筆者にはサウンドドラマ制作の上で BG レベルというものは基本的にありません。背景になる音や音楽の量的な多い少ないや劇伴などのアレンジがピアノやピアノシモの演奏ということはありません。また基本的なことですがサウンドドラマ制作では基本レベルという概念が筆者の中では存在しません。提供媒体が放送であれば CD であればその媒体の中にすべての音を表現することが重要で例えば語り手のレベルは VU メータなどで -2dB とかは設定していません。聴取者がどういう音量で聴取しているかそれは様々です。筆者はサウンドドラマでの語り手や台詞の聴取音量を通常聴取者のスピーカー位置で実際に登場人物が普通の会話をしている時その位置で登場人物が会話している音量を前提に設定しています。媒体特性の最大ピーク音量に作品の中の最大音量素材を合わせ、その音とのドラマ上音量の相対関係から人物や語り手のレベル設定を決定しています。以前にもお話ししたように作品の冒頭アナウンサーが私の声が~というメッセージはとても大切な役を担っているのです。BG レベルの話に戻りますが、何を基準に BG レベル? なのですか、相対的な問題だとこれで理解できます。聴取音量の問題と録音レ

ベルの問題は別物です。また読者皆様、諸先輩の方々は台詞や語り手バックに大きな音量のオーケストラ演奏など使ってはいないと思います。優秀な劇伴制作者はその楽曲のどこに台詞が入るのか計算して楽器数や演奏法を考えてアレンジしているのです音が大きいから無理矢理相対レベルを変更するのではなく自然なバランスでミックス出来るように素材自体が仕込まれているのです。複数音を組み合わせ丁寧に創られた効果音などはその素材音の数や組み合わせの変更で十分対応できるものでなくてはなりません。繰り返しになりますが「聴取音量と作品録音レベル設定は別物」「BG レベルは相対的な関係、下げずに使える素材をお願いいたします。」これでミックス作業も楽になります。

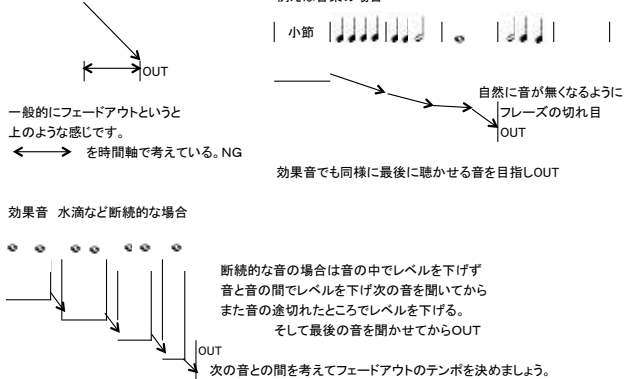
☆ DAW へのアプローチとても便利な機材です。I

音声調整卓の話をするとき必ず話題に上がることに DAW の存在があります。DAW デジタルオーディオワークステーション今時チョット古い言い方もかもしれません。DAW という言い方が主流です。現在音声調整卓にはもちろん純粋な? アナログもあります。そしてアナログデジコン (扱う信号はアナログでミキシングコントロールはデジタル)、純粋な? デジタル卓、DAW はレコーダーとミックス機能、編集機能が合体した PC ベースの音声機材です。PC ベースである以上様々なアプリケーションがあり汎用 PC 上で動作するものや専用ハードウェアが用意されたものがあることはご存じの事と思います。各社様々な機能を有したものがありますが基本的に DAW の導入がサウンドドラマ制作に及ぼした影響は大きなものでした。まずその第一は一機の機材で全ての制作作業が完結できる点にあります。ここで言う全ての作業とは録音、編集、ミックスに限らず劇伴の作曲、アレンジ、演奏?、台本の執筆、修正、等等筆者はノート PC 2 台を同期リンクして音声編集作業と同時に台詞などのタイミングにあわせテキストの編集や劇伴制作者や効果音制作者と同時にデータのやり取りをして

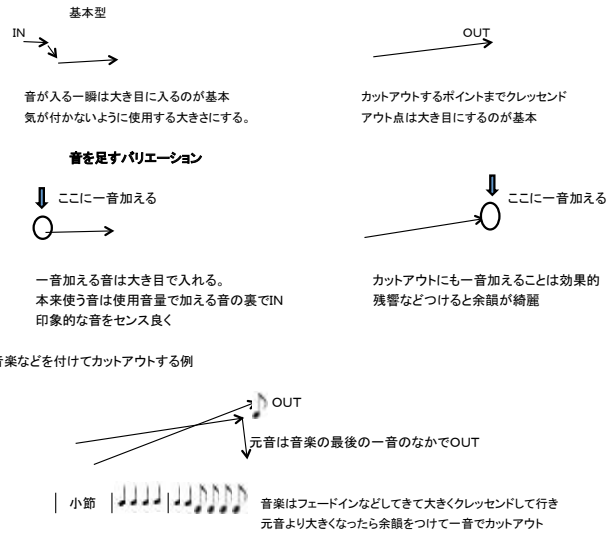
資料 図解

前回のフェードイン・アウトと比較して

フェードアウト



カットイン・アウトの例



フェードイン・アウトやカットイン・アウトには様々なバリエーションがあります。臨機応変にセンス良く使いましょう。

スタジオ作業の準備をしています。事前にほとんどの作業を自宅で可能にしてくれました。環境的には自宅には極小規模な調整室機能しかありませんがエンジニアや効果音担当者、劇伴制作者から送られてくるデータは本番素材そのものです。またその素材に加工編集をDAW上で加えてもデータ上の書き換えなので元音の質を損なうことがありません。最近の劇伴制作者は例えば2CH完パケでデータを送ってはきません各劇伴は楽器パートごとにマルチトラックデータで送られてきます。MIDI音源と音楽制作ソフトがあれば音楽制作データでの作業も可能です。音楽打ち込み作業が出来るエンジニアならば質の高い機材を使い劇伴制作者とコミュニケーションを取りながら完成させることが可能です。今や素材や台詞の収録、試聴と最終ミックスを兼ねた作業以外はスタジオでの作業が必要では無くなったと言っても過言ではありません。(筆者はコミュニケーションの関係でスタジオ共同作業の必要性は重要と考えています) DAW個々の性能は様々ですがまず性能にはかわらず制作の作業環境が著しく向上することは確かです。

☆ DAWへのアプローチとても便利な機材です。II

DAW作業環境の構築にあたって大切なポイントがいくつかあります。サウンドドラマ制作では放送番組制作やMA作業とは

若干ちがった作業環境が求められます。スタジオ以外の環境ではそれぞれの担当者がそれなりに作業し易いシステムを構築していると思いますが、共同作業を行うスタジオではすべての作業でそれが可能である環境を構築する必要があります。もちろん事前準備に万全を期することは当たり前ですが試聴設備の十分なスタジオ作業時に例えば台詞の変更、劇伴の尺変更が起こりますメインの調整室でもある程度のシステム構築は可能ですが作業スペースの確保、構築予算やシステムの使い勝手などが問題となります。そこでメインとなるスタジオ調整室近隣にそれぞれの作業スペースを設置することをお勧めします。一例ですが筆者の勤務先であったところのシステムをご紹介します。メインとなるスタジオ調整室から歩いて10秒の所にDAW編集設備がブーススタイルで(10ブース)、音楽制作打ち込み編集ブースが一つ、すべてLANでデータのやり取りが可能です。メインの調整室で作業途中すぐに修正作業ができるように作業前から素材をすべてそこで準備してから作業に入るようにしていました出演者の打ち合わせ室もそこにあります。台本の変更、素材との合わせ、効果音担当者の素材ごとの分担加工などすべての作業が同時進行できます。あとは内線電話もありますが10秒の距離ですからADさんが往き来すれば確実です。音楽制作ブースに

は小型のデジタル卓や各種音源、キーボードなどもありその場で劇伴制作も可能です。使用PCには代表的な音楽制作ソフトを複数用意しておくことも重要です。DAWソフトは各ブースやスタジオでも共通のものが使われています。勤務先ではプロツールとオーディオディッシュが使われていました。またリアルタイムでの音声データのやり取りはスタジオ間とブース間との専用LANが構築されているためPC間で直接データを扱っても遅延や位相など全く問題ありませんでした。システムについては機会をみてもう少し説明したいと思います。

☆次回は

今回は若干ですがDAWについても音声調整卓のお話しの延長線上で取り上げました。具体的DAWミックス、編集のお話は次回以降になりますが、DAW導入がサウンドドラマ制作に十分に貢献していること、またその機能の基本を理解した上でスタジオ夜話的な使い方など考えてみたいと思います。次回はDAW導入とそのシステム背景をサウンドドラマ制作に特化してお話します。毎日が一步一步冬の陽気へと変化しています。くれぐれもお身体を大切にお過ごしください。

— 森田 雅行 —